
His Secret

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H i s S e c r e t

【Nコード】

N 9 6 9 7 C

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

タイトルを見ただけで、内容が分かったあなたはペロコの思考が分かっていますね！（褒めているのか、貶しているのか…）☆快青ですね、多分。（…多分？）話の分類は、どうも分けにくいので無選択です☆快斗一人称小説となっています。久しぶりに書いた。『キッドside』以来ですね☆では、読んでいただけたら嬉しいです（＊＾－＾＊）

オレが甘かったのかもしれない。

鈍いから気づくことはないと思い込んでいた。

バレるわけがないと鷹をくくっていた。

ポーカーフェイスで隠しとおせると思っていた。

守っているつもりが、守られていた。

秋の気配はあっという間に消えてなくなり、まだ11月だというのに寒い日だった。

暑かろうが寒かろうが、オレ——怪盗キッドには関係なく、厳しい寒さの中仕事をしていた。

もつとも、オレが出てくれば、自然と……

「キッド！ 今日という今日は貴様を！」

と怒鳴り声を上げるオレ専任といってもいいぐらいの中森警部も仕事となる。

「こんばんは、中森警部。寒い中、ご苦勞様です」

「ハッ！ それも今日で終わりだ。貴様は、これから署に行くんだ

からな！」

「お誘いいただき誠に嬉しいのですが、辞退させていただきます。
また会いましょうね」

「か、かかれ〜!!」

「……中森警部v」

POM☆

一瞬で警官に変装すると同時に、用意していたダミーを飛ばしたら、

「くそっ！ 追うんだ！ A班はワシについて来い！ B班、C班
は車で奴を追え！ 今日こそ奴を捕まえるんだ！ 絶対に逃がすな
！」

「はっ！」

中森警部の指示の下、ドドドドとすごい音でダミーを追いかけていた。
った。

誰もいなくなり、静かになる。

いかに、今までうるさかったのかよく分かる。

「さて、帰りますか。……つとその前に、確認確認」

くると手を返し、宝石を満月に翳すも、探している赤い光は見当たらない。

「今夜もハズレ。赤いお姫さんはどこにいるのかな〜？ ま、とり
あえず、この宝石は警部のトコに返して、帰るか。寒いし」

羽根をひろげ、寒空の下、警視庁へ向かって飛び立つ。

まさか、今追われている怪盗が警視庁にいるとは誰も思うまい。

オレのために狩り出されて出払っている二課の窓をやすやすと開け、音もなく中に侵入し、今夜の戦利品とメッセージを残し、再び羽根をひろげて早々に退散する。

長居は無用！　ってね。

とはいえ、このままの格好で帰るわけにもいかないので、近くの公園で快斗に戻ることに。

てなわけで、トイレに入り、トレーナーにジャンパー、Gパンに着替え、トイレを出て……

…固まった。

「快斗、どうしたの？　こんな時間に」

まっすぐとこっちを見て言う青子が立っていたから。
しかし、すぐに我に返り言い返す。

「あ、青子こそ、何やってんだよ!? お子様は寝る時間だぜ?」

すると、青子は目を伏せて言った。

「青子ね、快斗待ってたの」

「……へ?」

「だから、快斗を待ってたの!」

「それはここに理由になんねえだろ?」

「……快斗の家に宿題で分かんないところがあつたから見せてもらおうと思っで行ったんだけど、快斗いなくて。おばさんに聞いたら『その辺ほつつき歩いてんでしょ』って言われたから、探してたの。寺井さんのところにもいなかったから、こっちに歩いてきて……」

再び視線を上げ、まっすぐとオレを見て言った。

「歩いてきたらね、キッドがトイレに入っで行ったの」

「キッドが!?!」

誤魔化せるか。まさか、青子に見られてるなんて思わなかった。
今まで以上にポーカーフェイスで表情を隠さなければならない。

「何してるんだらうって思ってた……快斗が出てきたんだよ」
「何かの間違いじゃねえの!?! 確かに今日はキッドの予告日だけど、こんな所に来ねえだろ」

「……快斗、もういいよ。これ以上青子に嘘つかないで？ 悲しくさせないで？ 青子も快斗の……ううん、キッドの力にならせて。そりゃ、今まで散々文句も言ってきたけど」

青子の目はまっすぐだった。

怒っているわけでもなく、哀れむわけでもない。決意を秘めた目だった。

限界、かな……。

それに、そんな目で見られたらねえ？

辺りに他の人の気配が無いことを確認し、素早くキッドへと変わる。

「！！ ……キッド、ううん、快斗だよね？」

「ええ。そういえば、これほど近くでお会いするのは初めてですね」

そう言いながら、青子の近くに歩いていく。

「やっぱり快斗だったんだ……」

「やっぱり、とは？」

「確証は無かったもん。だって相手は快斗だよ？ 上手く誤魔化されるかもしれない。それにもしかしたら、キッドが快斗に変装してたのかもしれないしね」

「……………」

「前からね、おかしいとは思ってたんだ。快斗ってば、キッドの予告日の前後に集中して授業中に寝てるし。最初はその程度だったん

だけだね。今日見て、なんか納得しちゃった」

でも、賭けだったんだよ？ と笑う。

「……は、あははは……!!」

「ちょっと、どうしたの!？」

きつと、甘く見すぎていたんだ。

青子は鈍いから、なんて根拠もないのに思い込んでいたんだ。幼なじみという位置にいるからこそ、1番に気づくだろうに。そんなことも思いもしないで。

守っているつもりが、自分が守られていた。

こんなオチ、誰が考える？ おかしすぎだろ？

「いえ、失礼しました。何でもありません。では、改めてよろしく
お願いしますね……」

青子 V

パチンとウインクを決めれば、真っ赤になりながら

「キザ」

と呟いた。

ハハ、悪かったな。“キッド”なんだよ、これが。

姿を元に戻し、

「じゃあねえだろ？ 挨拶は大事だし」

とぶつぶつ言ってたら、

「帰ろ、快斗」

と手を出してきた。

「……おう！」

その手を握り、家へと歩き出す。

「あ、今思ったんだけど、これって連行？」

「は？」

「だって、お父さんもうすぐ帰って来ると思うし。快斗追うのに疲れてね！」

「オイ、まさか……」

「言っちゃおっかな〜？」

「ちよっ、青子！ それはマジで勘弁して！」

「あはは、焦ってる焦ってる」

「青子お〜」

このアマ、すげえ性格してやがる。これからずっとこんな調子になっちゃうのかよ？

オレの立場かなり危ないじゃん。

ま、簡単に認めたオレもオレだけどさ。

だって、あんな目で見られたら騙せねえじゃん。

だが、その横で青子は真剣な表情になり、こっちを見て言った。

「大丈夫だよ。何か理由があってやってたんでしょ？ 何となくだけど、それぐらい分かるよ、青子にも。快斗が言って楽になるなら聞くけど、そうじゃないなら、誰にも言わないし何にも聞かないけど、快斗が無事に帰って来るように祈ることぐらいはさせてよね？」

いつの間に、この幼なじみはこれ程までに強くなっていたのだろう。ずっと近くにいたのに、気づきもしなかった。

青子は、オレの変化を敏感に感じ取っていたというのに。

「……参った」

「え？」

「何でもねー！ ホラ、早く帰るぞ！」

「う、うん！」

これから先、何があってもきつと大丈夫。

この温かい手がオレを支えてくれるだろうから。

ずっと見守ってくれていた優しい幼なじみが隣にいるから。

（後書き）

みなさん、こんにちは。ペロコです。

ひたすら短編を書いています。（……勉強は？）

☆さて「やっと書けたあ！」と叫びたくなった今回のお話。ズバリ、「バレちゃった瞬間」。リクエストされたものです、コレも。

もしかしたら、想像と違ってました？ それならゴメンなさい。やけに聡く理解力のある青子ちゃんになってしまいました。怒って泣いて……というのは、どうも書けないんです。書けるなら、その方がよかったかもしれませんね。

「Calling」は、この後の設定になりますね、自然と。あれは大学生設定だったし。

☆快斗一人称は、書き慣れたのかスラスラ書けますね。逆に、風景描写が苦手なうちにとって、三人称の方が厳しいです。どうしても会話が多くなりますし。

☆読んでくれた中で、どれだけの方がタイトルで中身が分かったんでしょう？ 結構気になっていたりします。シンプルにタイトルをつける……というか、タイトルをつけるのに時間がかかるので、かなり単純なタイトルになるのです。

☆さて、「分かったぞ！」と言う方は、ペロコまでご一報下さい（笑）分からなかった方も、別に「分かりませんでした」と正直に書いていただく必要は全くありませんので、感想をいただけたら嬉しいです。

ネタ……切れました（爆）甘い話って、どうやって書くんだ？ 何かネタが落ちていないか探す日々のペロコに救いの手を！

☆変な後書きでスイマセン。これからもよろしくお願いします!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9697c/>

H i s S e c r e t

2010年10月16日10時07分発行